

エーレンベルク稿と決定版 - グリム昔話への一考察 -

著者	小澤 俊夫
雑誌名	東北ドイツ文学研究
巻	1
ページ	1-8
発行年	1957
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133422

エーレンベルク稿と決定版

— グリム昔話への一考察 —

小 澤 俊 夫

グリム兄弟は一八二二年に“Kinder- und Hausmärchen”の初版を出したが、その二年前一八一〇年に、すでに童話集の刊行を企てていたクレメンス・ブレンターノの願いによつて、それまでに蒐集した昔話(Volksmärchen)を当時の彼の所在地ベルリンに向けて送つてゐる。その稿はその後行方が知れなかつたが Oberelass, Öttenberg のトラピスト修道院の書庫に、ブレンターノの“Chronika des fahrenden Schülers”の下書きとともに入つてゐることが判

り、一九二四年にフランツ・シュルツの編集で“Die Märchen der Brüder Grimm in der Urform”の題名で出版され、さらに一九二七年にはヨゼフ・レフツ⁽²⁾の編集により“Märchen der Brüder Grimm Urfassung nach der Originalhandschrift der Abtei Öttenberg im Elsass”の名で出版された。これにはヴィルヘルムの筆跡のもの十四篇⁽³⁾、ヤコブのもの廿七篇⁽⁴⁾、その他名は判らぬが兄弟の蒐集を手伝つてくれた人々のもの七篇⁽⁵⁾(これはレフツに依れば筆跡から四人に判別出来る)が入つて居る。このレフツの編集によるものをこゝではエーレンベルク稿と仮に呼ぶことにするが、その中には後のい

ずれかの版の註の中に入れられたもの八篇(W. 6, W. 13, J. 8, J. 11, J. 16, J. 18, L. 4, L. 5)にも發表されなかつたもの六篇(J. 13, 14, 17, 19, 20, L. 4)がある。従つて全四十八篇中、三十四篇が後に K. H. M. の何版かの中へ、何らかの形で入つてゐることになるが、それらと現在読まれている決定版(一八五七年第七版)のそれに相当するものとを比べてみると、非常に違いがあることが判る。その違いはどういう違いか。そしてそれは何を意味するかという問題は、グリム兄弟の昔話への考え方を知る上に、また昔話そのものの考察の上に重要であらう。

比較して先ず眼につくことは、第七版は詳しい物語になつて居る、従つて個々の話のはるかに大きくなつてゐる点である。エーレンベルク稿の方で言えば、話の筋(Handlung)のみが述べられてゐる、時にはそれさえも或る部分が欠けてゐることがある。従つて短い物語であるという点である。

記述上の差異の、いくつか目立つ点を挙げてみよう。

文章中の形容詞が、エーレンベルク版では gross, schön などごく原則的なもののみで、こまかいニュアンスのあるものは使われて

いず、数の上でも少なく、皆無のものさえあるが(W. 4)、七版では数が多いばかりでなく、多様な形容詞が豊富に使われている。

状況描写の詳しき。それはいろいろな形でいたる所に見られるが例として“Dornröschen”(7版 Nr. 53. Ö. 稿 J. 10)を見ると、十五才になったら紡錘を刺して死ぬ(眠る)と仙女(weise Frau)に予言されて、その十五年が経過したとき、エーレンベルク稿 und als die Königstochter nun fünfzehnjährig war und eines Tages die Eltern ausgegangen waren,……七版 Es geschah, dass an dem Tage, wo es gerade fünfzehn Jahre alt ward, der König und die Königin nicht zu Haus waren,……後者の方が、十五才になった日と父母の留守との一致を強調している。(後述抽象的性格参照)茨の生垣が彼女の眠っている城の周囲に出来てから後の筋は、或る王子が現れ、幸運にも Dornröschen にまで到達できて、くちついで眠りから覚めさせて結婚するということであり、それをエーレンベルク稿では必要なことだけを述べて僅か十一行で (Ö. S. 84) 書いている。それに対し七版は、その王子が現れる以前に多くの王子たちが死んだことや、老人の話、彼自身の気持などを加え、茨垣がこの王子にどんなに好意的であつたか、また城の中の様子などを、かなり説明的に述べている。

“Hänsel und Gretel”(7版 Nr. 15. Ö. 稿 W. 5)の父母の対比としてエーレンベルク稿では父の心中の苦しみは僅かしか触れられていないのに対し、七版では父は子供たちを捨ててに忍びなかつたことを三回とも強くはつきりと述べている。(後述平面性参照)

“Sneewittchen”(7版 Nr. 53. Ö. 稿 J. 24)の美しさはエーレンベルク稿では ein wunderschönes Töchterlein であり hundert-

tausendmal schöner と際立つた美しさを述べているが、それは原則的な形容でしかない。が七版では、七才になると

……, war es so schön wie der klare Tag und schöner als die Königin selbst.

これは wunder ではなく hunderttausendmal ではないが、むしろ具体的、現実的な叙述である。

敘述の反復。同じ昔話の中で、女王と魔法の鏡との問答、エーレンベルク稿では、

“Spieglein, Spieglein an der Wand, wer ist die schönste Frau in ganz Engelland?”

“die Frau Königin ist die schönste, aber Schneeweissen ist noch hunderttausendmal viel schöner”.

という形は第一回目だけで、二回目からは

Als nun die Frau Königin hörte, dass Schneeweissen bei den sieben Zwergen wäre und nicht im Wald umgekommen,……

と単に説明するだけとなる。しかるに七版では、問の韻文も答の韻文も四度とも正確に繰り返している。この忠実な反復は七版の特徴的な性格の一つである。

“Die zwei Brüder”(7版 Nr. 60. Ö. 稿 W. 13 L. 5)はその典型的な例である。二人の兄弟が旅で、兎、狐、狼、熊、ししを射ようとする、各々 “Lieber Jäger, lass mich leben, / ich will dir auch zwei Junge geben.” と言うが、五回完全に反復されている。

また竜との戦の後、狩人も王女も眠り、見張りを言いつけられた動物たちも次々に次のように眠りてしまふ。 “lege dich neben

nich, ich muss ein wenig schlafen, und wenn was kommt, so wecke mich auf."これも四回忠実に反復されている。それらがめづめて主人達が殺されているのを見て驚き "warum hast du mich nicht geweckt?" これも四回全く同じ反復。さらに王女の結婚式の日に動物たちが王女の所へ行つていう言葉 "mein Herr, der den Drachen getötet hat, ist hier und schickt mich, ich soll um ein Brot bitten, wie es der König isst". パンが焼肉、酒などとなるだけで全く同じ反復五回。この昔話に相当するエーレンベルク稿の二篇にはこうした反復は全然なく、説明文として事実を説明しているだけである。

七版には反復の例は多い。ヘンゼルとグレーテルが夜、眠れないでいると、父と母が話しているのが聞える、エーレンベルク稿 W・5 では二度目は簡単に扱われているが、七版では忠実に会話の形で反復されている。

白雪姫が小人たちの家に入つて眠つてるところへ小人たちが帰つて来たとき、七版では七人が完全に同じ形の言葉 "wer hat auf meinem Stuhlchen gegessen?" "wer hat von meinem Tellerchen gegessen?" その他、を繰り返して行くが、エーレンベルク稿では五人の言葉しかない。

しかしその稿にも反復が全然ないわけではない。例えばヘンゼルが家を振り返つて見るところは、会話もそのまゝで繰り返されている。逆に七版にも反復によらず単に説明しているところもある。(白雪姫がベツトに眠つているのを見つける段、その他)

反復と関係あることで、七版には直接話法が多い。即ちエーレンベルク稿では単に説明している筋が、対話の形で具体的に進められて

いる場合が極めて多い。例えば "Dornröschen" で一人の王子が来て茨姫の伝説を聞き、そこへ行く決意を述べる段、エーレンベルク稿では決心するまでの経緯は簡単にしか述べられていず、会話形式は使われていないのに対し、七版ではそれまでの経緯が詳しく述べられ、決意の段は

"Ich fürchte mich nicht, ich will hinaus und das schöne Dornröschen sehen".

と直接話法で書かれてある。この点はかなり多くの例が見うけられる。(Ol. 版 W. 8 "Dümmling" → 初版 Nr. 64 III "die drei Federn" J. 1 "Der Wolf" → 7 版 Nr. 5 "Der Wolf und die sieben jungen Geiseln" J. 4 "Blutwurst" → 7 版 Nr. 42 "Der Herr Gevatter" W. 13 "Die zwei Schornsteinfeger Jungen" → 7 版 Nr. 60 "Die zwei Brüder" その他)

これらの記述の仕方の違いに伴つて、各部分の記述に費やされる量にも差異が生じている。グリム昔話集全体について、興味の中心となることだけが述べられ他は顧みられないという性格を挙げる事が出来る。従つて本筋だけしかなく、例えば登場人物も不可欠のものだけであり、主人公の家族や社会共同体も、主人公の行為に必要な時だけ述べられている。また、主人公が救われて、それで本筋が終るとその後のことは極めて簡単にしか述べられないのが普通である。「そして彼はその王女と結婚し、死ぬまで幸福に暮した。」という具合に。エーレンベルク稿にはその性質が特に強く現われている。各部の記述に費やされた量を比較してみると、例えば "Dornröschen" 予言通り十五才になった日に眠りに陥るところで前後に分けると、七版では二対一・五で前後の均衡がとれていると

言えるが、エーレンベルク版では七対三で前半がはるかに多い。即ち仙女の予言とその実現の、スリルに富んだ話の部分である。そして王子のくちづけによつて目覚め、結婚に到る段は七版では四分の一

頁、エーレンベルク稿では僅か二行であつたりとしくくられてゐる。七版のバランスは、後半王子のくちづけによる目覚めが大きく扱われているのであり、そこで、王子が決心するまでの経緯や眠つてゐる城の中の様子が語られてゐる。“Hänsel und Gretel”二人が森の中に捨てられ、三日間さまよつた挙句、あるお菓子の家にたどり着くところで前後に分けると、七版二対一、エーレンベルク稿三対一。即ち後者に於いては、親に捨てられるまでのこと、森をさまようあの悲しい場面に多くの言葉が費やされていて、魔女を殺すまでの経緯はそれに比して少い。それが七版では割に多くなつていて均勢がとれた形になる。そして結末は、三日間も迷つた森の筈なのに魔女を殺し、寶石を奪つてしまふと迷わずに家に帰ることが出来る。即ち、二人の冒険物語はもう終つたのであるから迷ふ必要がない。これを語り、或いは聞いた人々の関心はもうそこにはないから、筋は終結へと急ぐことが許される。七版ではこの部分一頁強書かれてゐるが、エーレンベルク稿はその性質が一層明瞭で僅か五行しか書かれてゐない。昔話では、文芸としての様式が問題なのではなくて、それが民衆の間に語りつがれて来る間に、人々の関心が強く集つた所はいつしか強調して語られ、詳しくなり、部分的に拡大されて来たのであらうが、そのことがエーレンベルク稿では特によく感じられるのである。“Sneewitchen” 7版 Nr. 53 → Ol. 變 J. 24 “Die sieben Raben” 7版 Nr. 25 → Ol. 變 J. 22 その他。）
こゝでも、七版の整備された構成に比し、エーレンベルク稿は伝

えられたまゝの姿で、従つて欠けていることは多いが、語り伝えた人々の氣持を直接にわれ／＼に伝えてくれると言ひ得る。

以上の記述上の差異はわれ／＼に何を暗示するだらうか。

周知のごとくグリム兄弟は、一八二年初版以来、版を重ねるに従つて稿を改めて行つたが、その方向は、民俗学(Volkstunde)的記録から、次第に文芸としての鑑賞に耐えるものへと向つて行つた。それには昔話蒐集における先輩C・ブレンターノ、A・v・アルニムとの論争、および版に従つて昔話集の仕事がヴィルヘルムの手に移つて行つた事実(ヤコプが全く関与しなかつたのではないが)等の背景も考え合わせねばならぬわけであるが、とにかく文芸意識の全くない、単なる「お話」としてのエーレンベルク稿が、七版では、豊富な形容詞を用い、筋の各部に物語としての面白い説明が加わり、筋の中の反復は忠実に全く同じ言葉で繰り返され、会話形式で具体的に進められ、論理的とは言えないまでも話のつちつまが合はされていて、いわばスタイルの整つた物語となつてゐると言へるであらう。エーレンベルク稿には完全にメロ風なものさであるが、(J. 18 “Goldner Hirsch” J. 2 “Altelei Raucher” J. 3 “Armes Mädchen”, J. 6 “Däumling” W. 6 “Dümmling”)七版ではそれらが拡大され、或いは綜合されて完成した物語となつてゐる。しかしその文芸への指向は勿論民俗学の記録としての性質を払拭し去つてはいない。(その点ブレンターノらと全く異なる態度をとつてゐる。)それどころか七版では、エーレンベルク稿には見られない多くの伝説的要素が加へられてゐる。白雪姫がその美しさのあまり母親に捨てられる段、エーレンベルク稿では二人一緒に車に乗つて森の中を走つてい

るとき、美しい薔薇の花があるので母親が彼女に取つて来いと命じ、彼女が車から降りた途端、急に車を走らせて行つてしまふ。それに對し七版では、女王は一人の狩人呼んで“Bring das Kind hinaus in den Wald, ich wil's nicht mehr vor meinen Augen. Du sollst es töten und mir Lunge und Leber zum Wahrzeichen mitbringen.”という。この抹殺方法は、前者の、簡単に考えられる方法よりも伝説の中に根を持つてゐる。(この点は、こまかい部分に数多く見られるが、例えば“Die sieben Raben” 7版 Nr. 25 O. 稿 J. 22)

マクス・リュティは⁽⁶⁾「抽象衝動をその創造の根底に持つ文芸」としてヨーロッパの昔話を見ているが、その立場からこの両版の差異を見ることも興味あることである。

彼は文藝学的考察とことわつて、ヨーロッパの昔話の本質的性格として次の五点を指摘している。

1. Eindimensionalität
2. Flächenhaftigkeit
3. Abstrakter Stil
4. Isolation und Allverbundenheit
5. Sublimation und Welthaltigkeit

これらの一々を吟味すべき場所ではないが、この立場から見ると、両版の差異は本質的差異ではないが、程度の差がかなりあるということになる。

前述の忠実な反復は孤立性(Isolation)を示すもの、従つて抽象的性格を与えるものであるから、忠実に反復している七版の方にその

性格が明確に現われていることになり、また前述の“Dornröschen”などで見られた時間の一致の強調もその性格を明らかにしていることになる。その意味では、文芸として完全に整備された七版は、整備されたということと同時に抽象的性格を明確に備えて来たといふべきである。

筋の發展 (Handlungslinie) のみを重視するということから見れば、状況描写の詳しくないエーレンベルク稿の方がその傾向は強い。七版では詳しい状況描写とともに必然的に、本筋とは直接關係のないこともつけ加えて面白く書かれている傾向があるが、前者では、全体短い話の中に筋だけを書いている。主人公の属する家族や社会は、エーレンベルク稿では全く述べられないが、七版ではある程度述べられる。例えば前述の“Hänsel und Gretel”において、筋の發展に必要なのは残忍な母親だけなのであるから、父親の心中の苦しみを書くことは、その家族を幾分具体的に書くことになる。(勿論それも、父がどの様に苦しんだかが描かれているのではなく、母親の意見に逆らつたという行為において、苦しんだということが述べられてあるに過ぎない。) 従つてこの記述の平面性(Flächenhaftigkeit) の場合は、反復の場合と逆に、整えられていないということが抽象的性格を明確に示していることになる。

また他方七版に見られる数字的統一は強い抽象性を示している。例えば“Die zwei Brüder”で主人公にお伴する動物を見ると、二羽の兎、二匹の狐、二匹の狼、二匹の熊、二匹のししと徹底して統一されている。それに對しエーレンベルク稿では二羽の兎、一匹の熊だけである。即ち抽象性を示すほど十分に整備されていない。

形容詞について見ると、リュティの観点からすれば、七版の如く

豊富な種類と数には必要ではない。エーレンベルク稿に見られる gross, schön, jung などの単純なものだけが本質的に昔話に必要なものである。彼は次のように云言っている。

“Die Brüder Grimm verlassen den Stil des echten Märchens wenn sie von den roten Augen und dem wackelnden Kopf der Hexe erzählen, von ihrer langen Nase, auf welcher eine Brille sitzt—das wirkliche Volksmärchen spricht nur von einer «hässlichen Alten», einer «alten Hexe», einer «bösen Hexe» oder einfach von einem «alten Weib».

以上簡単に見たように、両版の比較の上で、リュティのいう抽象的性格がいずれによく現われているか、断することはできない。即ち記述の簡単であることが或る場合はそれを強め、或る場合は充分に示し得ないでいる。逆に記述の豊富さは、或いは完全にその性格を示し、或いは却つて不必要なことまで含むということになる。

しかしその「抽象的性格」だけでは説明できないものが、特に七版にはある。例えば茨姫が眠りからめざめたのは、たしかに百年という予言の期限が切れたからではあるが、七版には百年の経過と王子が乗りこんで行くときの、時間の一致の強調とともに、*“Da lag es (Dornröschen) und war so schön, dass er die Augen nicht abwenden konnte,……”* 美しかつたからとてそのことを忘れてはいない。白雪姫の場合も美しかつたので愛情を持ったのだということが忘れられていない。リュティは、昔話において主人公又は登場人物の行動は、筋の発展から規定的に生れて来るのであつて、主人公の意志によつてではないと述べているが、これらの例は、

筋の発展からの規定とともに、感情的動機も入っていることを示しているのではなからうか。エーレンベルク稿ではそれがほとんど見当らないし、多少それらしい言葉を使つていても、感情的動機と言へる程のものではないが、七版では「抽象的性格」だけでは説明できないものとして感じられる。

さて記述上の主な問題点は以上のごとくであるが、さらに、エーレンベルク稿の中では個々の話になつてゐるものが、後、いずれかの版の註釈に入り（又は入らずに）その代りにそれらを部分として含む大きな物語が収められている場合がある。

W. 6 W. 8 J. 8 L. 3 の “Dümmling” は初版 “Die drei Federn” (Nr. 64 III) の註に入つて居り、W. 10 “Marienkind” L. 2 “Das stumme Mädchen” は七版 “Marienkind” (Nr. 3) となつてゐる。W. 11 “Prinzessin Mäushaut” J. 2 “Allerlei Rauch” は七版 “Allerlei Rauch” のみとなり、W. 13 “Die zwei Schornsteinfeger’s Jungen” L. 5 “Von Johannes Wassersprung und Caspar Wassersprung” は七版 “Die zwei Brüder” (Nr. 60) となる。

この最後のものに最も問題があるので、先ず稿の変遷を見ると、W. 13 → 初版では Nr. 60 “Das Codei”

L. 5 → 同 Nr. 74 “Johannes Wassersprung und Caspar Wassersprung”

一八一九年第二版では “Die zwei Brüder” が Nr. 60 として入り上記の二篇は一八二二年の註釈版に入る。

七版 Nr. 60 の構成を見ると W. 13 に相当する金の卵をめぐる物語、捨て子として森の中で或る狩人に養われる物語、L. 5 に相当する

族、竜との戦い、結婚、森の中の魔女による石化、兄弟による救いの物語の三部と見ることが出来る。もちろんエーレンベルク稿の二篇に相当する部分は、それらよりもはるかに拡大されているのであり、全体としての量を較べると、二篇を合計した量三・五頁の約六倍、二十頁という長い物語になっている。確かにその中にはエーレンベルク稿のものよりも多く伝説に根ざした要素が入っているであろうし、反復は忠実に行われ、説明は詳しくなっているが、すでに見て来たように、抽象的性格のためには余計なものも入つて来ている。しかし、この「Die zwei Brüder」において特に問題なのは、かくの如く、いくつかの昔話を含んだ大きなものが、グリム兄弟が求めていた、元来の姿の昔話であろうか、という点である。各部の小さい物語は、確かにそのまゝの姿で民衆の間に語り継がれて来たであろう。しかしそうした物語を数多く包含した大きな物語は、その大きな姿で民衆の間を永いこと歩いて来たのであろうか。完璧な物語を求めるあまり、余りに集めすぎて却つて実際には民衆の間で語り伝えられたことのないものが生れて来る危険をおかしてはいないだろうか。民衆の間で実際に語られて来たものであれば、それが欠けるところの多いものでもそのまゝ「昔話集」の中に収録する意味があるとは言えない。しかし同時に、ある系統の物語全部がうまく統一されて含まれているということが、必ずしも昔話の真の姿でもないであろう。七版中エーレンベルク稿と関係のあるもので特にその危険性を感じるのはこゝに指摘した一篇であるが、七版の中には、そういう危険を冒して書かれているものが、かなりあるのではなからうか。

しかし反面、その危険を冒してまで七版に至つてかくの如く大き

な昔話にしたことは、グリム兄弟、特にヴィルヘルムが、一般の読物として耐え得るものにしようとした意図を示すということもできよう。

その他両版の差異のこまかい点をいささか挙げてみると、エーレンベルク稿には、記述上の不統一がしばしば見られる。例えば die junge (junge) と書いてある(1) Frau が急に Königin となり、Königssohn が急に König と書かれたり (L. 2 'Das stumme Mädchen') Schwester を受けつ zu dem; sein Leben としたり (J. 13 'Die goldne Ente')、その他綴字は現在の正字法と違うものが数多くある。

エーレンベルク稿では外国語 Prinz, Prinzessin, Kaiser などがかかり使われているが (W. 7, 10, 12, 13, 14, J. 7, 10, 11, 23, L. 5 その他) 七版ではほとんどドイツ語に改められている。

話の中にある語り手自身の言葉、例えば終結の「Mein Märchen ist aus, dort lauft eine Maus, wer sie fängt, darf sich eine grosse grosse Pelzkappe daraus machen」(7 版 'Hänsel und Gretel') のこときもの、即ち、関敬吾氏が結末の形式のうちの、「語り手自身に関する形式」として「語り手が、聞いた限りの一切を語つたことを現わす形式」と説明している言葉はエーレンベルク版には見当らない。

両版を比較しながら見て来たが、七版は民族の昔の名残りをあちこちにちりばめながらしかも整つた物語となつて居り、エーレンベルク稿は整つては居ないが、ボキ／＼したような短く切れる文章で、素朴な、親しみ深い物語である。我々はそうした粗末なものの中に、

七版とは異なる感動を覚える。それは、それらを守り伝えて来た人々の持つ感動が反響して来るようである。いろりの端で、煙にくすぶりながら老人の話を聞くような味わいと言うこともできよう。そして、そうしたひなびた昔話に対するグリム兄弟の愛着も察せられるが、しかしやはり七版のごとく整った形にして、文芸としての鑑賞に耐え得るものになつていなければ、百年もの間、世界中の人々の心の中に生き続けて来ることはできなかったことであろう。

(註)

- (1) Franz Schultz, (Zweite Jahresgabe der Frankfurter Bibliophilen=Gesellschaft 1924. Offenbach a. M.)
- (2) Joseph Leffitz, (Carl Winters Universitätsbuchhandlung Heidelberg 1927.)
- (3) I. Märchen/aufgezeichnet von Wilhelm Grimm ボトム
ノミ版に記載された順序に従う W. 1………と記す。
- (4) II. Märchen/aufgezeichnet von Jacob Grimm ボトム
………と記す。
- (5) III. Märchen/aufgezeichnet von Gewährsleuten ボトム
L. 1………と記す。
- (6) Max Lüthi: Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen (A. Francke Ag. Verlag, Bern 1947.)
- (7) ebd. S. 33f.
- (8) 関敬吾「民話」一一四頁